

## ネパール被災地を視察して No.2

特定非営利活動法人ミランクラブジャパン  
理事長 マナダール マダーブ ナラエン

ネパール大地震から5ヶ月が経ち、世界では災害や難民流出による混乱、事件、事故が休みなく報道されている。日本でも台風による河川の決壊で甚大な被害を被ったばかりだ。地震、火山噴火、台風など、日本ではいかに自然災害が多いかを目の当たりにする。打たれては立ち上がり、復興し、発展していく日本を凄いと思う。数々の大きなニュースを前にネパールに起こった天災はずいぶんと過去ようになってしまった。今回の帰国で復興が進まない現状を見て、忘れ去られていくことへの不安も覚えた。ようやくの新憲法制定に隣国インドの内政干渉があり、ガソリンなど物資が入らなくなってきた。この時期の政情不安は復興の妨げになる。

ミランクラブネパールが大きな被災地であるドルカ郡、シンドゥパルチョク、ラメチャブとサンク村を訪れ、支援物資や義援金を直接被災者へ手渡したことは報告済みである。

さらに8月5日、カトマンズ周辺の被災地タンコット、トカ、ブンガマティなどの里子たちにミランクラブネパールの事務所に来てもらい義援金を配布している。そして当日来られなかった里子たちへは毎月の奨学金を配る時に配布することにした。配布計画は進んでいる。

### ● シンドゥパルチョク郡の被災状況

カトマンズから約85km北東にあるシンドゥパルチョクは地震による被害が一番大きかった地域で郡の中心のチョウタラは壊滅状態だった。地震がなければ山間部の段々畑が広がるこの地域での生活はのんびりしたものだったに違いない。

8月19日、MCNメンバーと小林理事、街頭募金活動での義援金を寄付くださったPray for Nepalの、吉田代表、総勢8名でミランクラブネパールの事務所

を出発した。日本からはそれぞれがネパール入りしていて日程もそれぞれだったが、被災地視察では行動を共にした。

シンドゥパルチョク郡は、カトマンズからバクタプール、バネパを通過してチベットへ向かう幹線道路を經由して途中から山奥へ向かう道沿いにある地域である。山道は舗装されていたが、地震による山崩れが所々あり、また被災地に近づくにつれ、地震の爪痕が多く見受けられるようになってきた。チョウタラの入口は国際支援団体の車5、6台や大型バスで通行できず、私たちは車を降り歩いて町に入った。カトマンズを出て車で約4時間半かかっていた。被災地は雨だった。



広場にできたテント村

到着早々、ブペンドラ・パクリンさんの案内で視察を行った。彼は、以前はどんなだったか思い出せない程の町の変わり様を言葉にした。この地域には古い住まいが多いものの、鉄筋が入っている家もある。しかし多くの家々が倒壊していて残っている家も亀裂が生じていないものを見付けるのは難しい。住める場所がなく避難生活が長引くのをいやがり、亀裂の生じた家や一部倒壊の家に戻り住み続けている人たちは少なくない。この地域は震源であるドルカ郡から近い。私たちが行った前日も余震があったという。



被災した建物

視察後、カマラ・デビ・スレスタ支部長が里子、母親たち 40 名近くが集まっている会議室へ案内してくれた。Pray For Nepal の吉田代表から義援金を直接里子へ手渡した。また MCJ からの励ましのメッセージの内容を読み上げ、支部長に渡した。

スレスタ支部長からミランクラブの活動に感謝の言葉があった。里子の支援に留まらず、ミシンの職業訓練の支援や、こうした大地震で困った際の支援などに感謝している旨の言葉と感謝状を受け取った。今後地域を立て直すため可能な限りの協力をお願いとしての要請書も手渡された。要請書にはミシン教室の継続、里子の通っている学校の屋根の修理、地震による断水の解決のお願いなどが書かれてあった。



集まった里子たちと家族

会合の後、支部長や里子の仮設を視察した。ミランクラブからの義援金を使い建てたトタン仕様のものだった。床は土

の上にビニールシートやゴザ、布や絨毯を敷いたものだった。8 畳位のスペースで炊事も含め家族全員の生活の場なので、とても窮屈に思えた。避難生活が長引いた場合の健康上の問題が心配だ。

カトマンズに戻り、Pray for Nepal の吉田さんを、迷いながらもやっと彼女の知人宅へ送り届け、長い一日は終わった。

### ● サンク村の被災状況

サンクはカトマンズから約 1 時間のところにあり、チベットとの交易で栄えた。カトマンズやパタンに似た古都であるが、チベットへの別の幹線道路が 40 年ほど前にできてからは役目を終えたかのように、中世の佇まいのまま残されたのである。今回の大地震での被害が大きい地域の一つとなってしまった。



サンク村の里子たちと一緒に

被災地を案内してくれたのはサンクに住む元里子のラクチュミ・スレスタである。彼女は 1995 年からの里子で、現在は大学在学中から始めた小さな洋品店で生計を立てている。このサンクでは 40 名の里子を支援してきていて、現在も 9 名の里子がいる。ラクチュミ・スレスタは里子たちへの奨学金の受け渡しや勉強の手伝いなど、里子の面倒をよく見ている。私たちの支援が成長した里子たちに引き継がれることを望んでいる私たちにとって、彼女の存在は大きい。まさにミランクラブが考えている OB で里子たちのお姉さんの存在である。彼女の特別里親は MCJ の上村元副会長だった。

8月20日、昨日とほぼ同じメンバー8名でサンクを訪れた。まず初めに里子たちと会い、地震の被害状況を聞いた。里子たちは家が壊れて補修しながら辛うじて住んでいたり、また自宅全壊で仮住まいとなっていたり、ミランクラブからの義援金がずいぶん助けになっていることに感謝していた。サンク周辺の村々から1時間以上かけて来た里子たちもいて、全員で話を聞きながら食事をした。ラクチュミ・スレスタにMCJからの励ましのメッセージカード渡した。その後、彼女の案内で被災地を視察した。広範囲に渡る被災地は殆どが全壊や半壊であった。ラクチュミが住んでいた家も4階建が1階部分しか残っていなかった。地震から4ヶ月過ぎたにも関わらず、至るところにまだ瓦礫が残っていて歩くのも大変だった。学校や寺院など、またその周辺も今は殆どが原形を留めていなかった。多くの建物には亀裂が生じ、住み続けるには怖いと感じた。



サンク村の倒壊した家

ラクチュミの住まいの近くに地震で亡くなった里子ラシュミ・プラジャパティの家があった。現在、仮設に住む彼女の母親に会ってきた。反対方向に逃げていれば助かったのにと涙ぐむ彼女に私たちができることは数少なかった。同行の小林理事はダルマスタリのアンジャリ・ガールの母親に渡した時のように心からの励ましを込めてお見舞金を渡した。



故ラシュミの家族の仮住まいとその内部



里子の仮住まいが見える村の風景

昨日に続き復興への道のりは遠いように感じた視察だった。

カトマンズへの帰路、地震の被害を受けた世界文化遺産ボードナート寺院を視察した。土砂降りの雨で寺院全体は見れなかったが、中心にある仏塔が倒壊して現在修復中だった。今回は観光客を殆ど見ることがなかった。

### ● ブンガマティ村の被災状況

地震はネパールの中部から北東にかけて大きな被害を及ぼした。ブンガマティもその線上にあった。8月22日、カトマンズからパタンを通過してブンガマティまで約30分かけMCNアドバイザー、ジャグディス・マナダールとバイクで行った。ブンガマティは古都でラトマチェンドラナートの山車が有名だ。京都の祇園祭りの山車に似ている。この山車の高さは約20メートル、工法は昔のままで釘を使わずに作られる。祭りでは約1ヶ月かけて山車で町を練り歩く。祭りの主役であるラトマチェンドラ神の寺院はブンガマティにあり、地震で全壊した。その周辺の寺院や家々も半壊や全壊で、ミランクラブの元里子たちの家への被害も多かった。



倒壊した寺院の石柱

● パタンの被災状況

8月23日、MCN 会計担当サガル・マナングールとバイクで三大古都の一つであるラリトプール郡パタンを視察した。世界文化遺産パタンはカトマンズから比較的近いので、観光客は必ずと言っていいほど訪れる。サンスクリット語からきているラリトプールのラリトは美術、プールは場所の意味である。その名の通りパタンには多くの寺院や古い建物、彫刻が残っている。

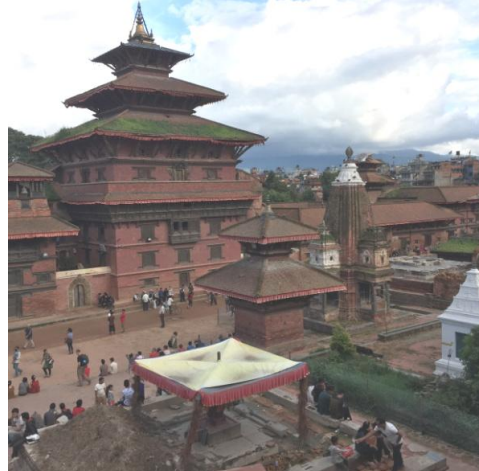


つかい棒をされる寺院群



今回の地震でこの町の被害も例外ではなかった。特に町の中心にある三重塔が

いくつも倒れ、世界遺産の損失となってしまった。また町を歩くと、新しく建てられた鉄筋コンクリート造りには被害は少なかったようだ。中世に建てられた建物には亀裂が入り、多くの古い建物はレンガとレンガを繋ぐ目地も粘土であるため、倒壊したものは多かった。



倒壊した三重塔内にあったシバ神を守る屋根(手前)

私の友人は16世紀に建てられたクリシュナ・マンディール寺院の真裏にある古い建物で観光客向けのレストランを営んでいる。3、4年ぶりに会った彼は復興には10数年はかかると不安を口にした。

● バクタプールの被災状況

8月24日、親戚の一人とバクタプールを視察した。三大古都の一つバクタプールはカトマンズとパタンに次ぐ大きな町である。都市国家であった中世に他の町と競い合いながら三重、四重、五重の塔ができた。サンスクリット語でバクタは信者、プールは場所の意味である。入場料が必要な世界文化遺産の町の中心は瓦礫が片付けられており、地震の影響があまりわからなかった。しかし実際被災した場所はもっと奥にあり、そこでは殆ど家が壊れ、瓦礫も片付けられないままになっていた。案内してくれた女性は、地震のことを思い出すだけで怖くてたまらないと言っていた。仮住まいの生活には将来の見通しが立たないと嘆いた。



王宮前広場にある建物を支える棒



倒壊した世界文化遺産の残骸



町の中心から奥に入った地域の現状



世界各国からの支援団体のテント村

## ● ダルマスタリを再度訪問

ネパール滞在中訪れた3回の内1回は8月22日MCNメンバーと一緒に吉田さんを案内した。義援金を受け取っていない里子へ吉田さんから義援金を渡してもらった。吉田さんは子供たちとの交流を図るため寄宿舎に数日泊った。



里子たちと吉田さん



里子たちとの交流

いつ起きてもおかしくない時期にあったネパールの地震、被害を大きくしたのは以下によるものだった。

<大半が耐震構造でない上、レンガや土壁である><建てられた当時のままの古い建物が多い><鉄筋コンクリート構造の手抜き工事><地震への備えの不足>

不幸を繰り返さないためにも政府には建築基準をしっかりと作り守る制度を確立してほしい。また仮住まいの被災者に国として精一杯の支援をしてほしい。

震災後、皆様から人と人の繋がりの中での善意の力の大きさを見せていただきました。支援の輪を広げてくださったことも、今月号で義援金のご報告をまたできることも、心から感謝しております。